

昭和43年度埋蔵文化財緊急調査概報

伝 鞆 智 城 跡

三 万 田 遺 跡

熊 本 県 教 育 委 員 会

序

各種開発工事によって破壊が予想される文化財の保護対策の一つとして熊本県が国庫補助を受けて埋蔵文化財の緊急調査を開始して本年度は第3年目にあたる。

本年は昨年が続いて鞠智城跡の調査を進めるとともに、圃場整備事業が計画された三万田遺跡の遺構分布調査を実施した。

両調査ともきわめて不利な自然条件の中で実施されたにもかかわらず、予期以上の成果をおさめ得たのは、調査員諸氏をはじめ、地元関係者の努力と協力のたまものと深く感謝する次第である。

なお、本書の刊行に当たり、御多忙の中に執筆くださった諸先生方に対して、ここに厚く御礼を申しあげるものである。

昭和44年3月

熊本県教育委員会

目 次

I 経 過 概 要	1
II 佐 官 ど ん	3
III 深 迫 門 礎 地 区	6
IV 土 壘	12
V 阿 高 礎 石 推 定 地	14
VI 小 結	16

I 経 過 概 要

熊本県教育委員会が鞠智城跡の調査に着手したのは、昭和42年夏のことであった。その直接的な動機となったのは畑地開田工事のため、城の中心部とみられる長者原一帯に、ブルドーザが入り多くの礎石群を根固め石ごと掘り返してしまったことによる。その時炭化した米や瓦・土器なども出土した。

その後開田工事は何の予告もなく進行し、昭和42年末から43年初頭にかけて、長者山礎石群の西側一帯の山林が開墾された。ついで43年2月には長者山の東側、宮野の礎石群が何らの事前調査も行なうことなく破壊された。宮野礎石群は鞠智城内において、古瓦を出土する最も有力な建物遺構の一つであった。さらに昭和43年4月には、鞠智城で最も有力な城門礎石のある菊池市深迫一帯の畑地が、ほとんど水田化されてしまった。このように鞠智城跡では、遺跡保護のための事前調査が追従できないほどの急速度で開発が進行した。そのため第二年度調査は昨年にもまして緊迫感がみなぎった。

第二年度調査は昭和43年8月17日から同23日まで、延べ一週間行なわれた。作業期間が短かいため調査区域を制限し、重点的な問題把握につとめた。まず深迫の城門礎石付近では、城外から城内に通じる進入路の方向を探るとともに、現地に残る門礎は旧位置のままであるかどうかについて再検討を行なった。また「長者山」「灰塚」「涼みの御所」など一連の尾根につながる「佐官どん」のステップには、はたして建築遺構があるかどうか。さらに城の外周をめぐる土塁線および崖線は、人工的なものかそれとも自然の懸崖か。中でも確実な土塁線はどの部分か。などに重点をおき集中的な調査を行なった。それらの成果は次にのべる通りである。

本年度の調査も前年通り埋蔵文化財緊急調査費の国庫補助をうけ、熊本県教育委員会主催のもとに地元の菊池市教育委員会・菊鹿町教育委員会が共催して行なった。

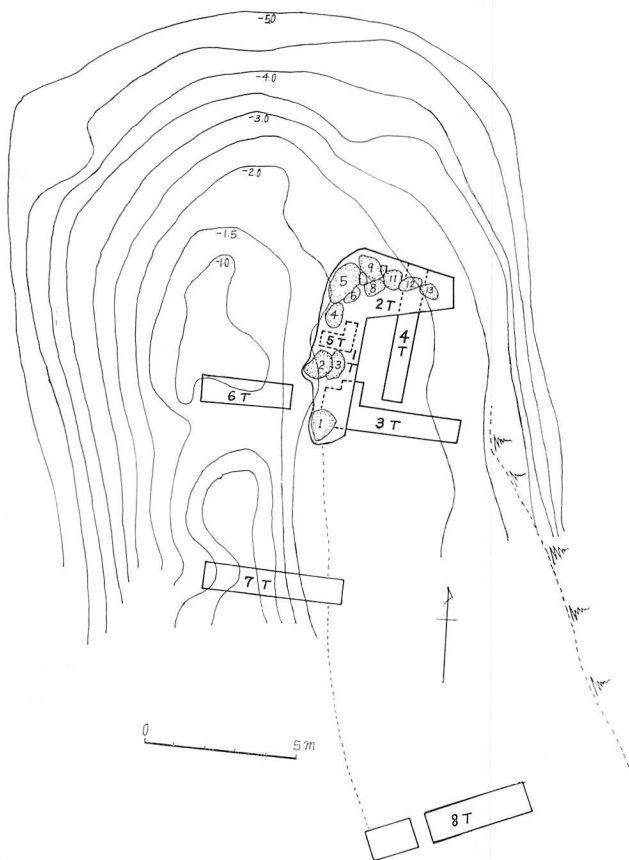
調査については九州大学鏡山猛教授の御指導をいただき、乙益重隆（熊本女子大学教授）、田辺哲夫（熊本県指導主事）原口長之（第二高校教諭）坂本経堯（肥後考古学会長）三島格（荒尾三中教諭）隈昭志（鹿本高校教諭）杉村彰一（鹿本高校教諭）緒方勉（肥後考古学会員）上野辰男（県社会教育課参事）らが担当し、鹿本高校、鹿本商工高校、両校出身者等数多くの協力参加を得た。調査の運営は社会教育課長重石隆三、文化係長松田英雄、主事高浜知完、主事小村昇、主事福田那知子らがあつた他、菊池市および菊鹿町教育委員会、米原部落民、調査地関係地主等数多くの人の協力と援助をいただいたことをお礼と共に申しのべる。

なお、本報告書の作成にあたっては、1.経過概要（上野辰男）2.佐官どん（田辺哲夫・緒方勉）3.深迫門礎地区（三島格）4.土塁（坂本経堯・隈昭志・杉村彰一）5.阿高の礎石群推定地（隈昭志）6.小結（乙益重隆）の各調査員がおのおの分担執筆した。（上野辰男）

Ⅱ 佐 官 ど ん

米原部落西方の連峰は従来土塁線と考えられてきた。佐官どんはその最北端にあたり、昭和42年度から調査を開始した。すでに第1年度の報告書にのべた通り礎石としては手頃な大きさの花崗岩が6個、土塁の裾にはほぼ南北に並んで露出している。しかしそれらはいずれも原位置を動いていることが明らかであった。ただ南側の第1号石だけは原位置を保っているものとする。さらにこれよりかぎの手状に7個の石が東に傾斜しながら埋没している状態を発掘した(第2トレンチ)が、石が並ぶ床面にのみ炭化物や焼土を伴ったので、これら7個の石が単なる自然堆積でないことを知った。

本年度の調査はこの位置に建築遺構の有無を追究することと、土塁の切断作業によって人工的な遺構を確認することに重点をおいた。



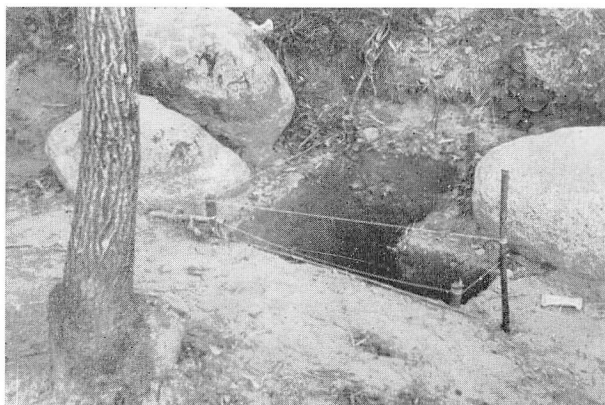
第2図 佐官どんトレンチ配置図

(1) 建築遺構

もし、この地点に建築遺構があるとすれば地積から考えて土塁線東側の幅約10m内外の平坦面以外には考えられない。そこで先づ動いていないと考えられる第1号石から東へむかって第3トレンチを掘開した。第1号石よりほぼ8尺にあたる地点で地山(花崗岩の風化霏乱層)が陥没し、その部位の地表下40cmで礫の集合状態を発見した。それは礎石を抜いた跡ではないかと考えたので、さらに北へ第4トレンチを設定した。しかし、このトレンチでは礎石を抜いた痕跡は見当らず、また第1号石より北8尺のところ掘開した第5トレンチにもそれらしき徴候はなかった。さらに第1号石の周囲を掘開したところ、根石

なども存在せず、この石も原位置から移動したものであることが判明した。これらの結果、佐官どん土塁線下の車路先端部の平坦面には、礎石で原位置をとどめるものは皆無であり、根石や礎石を抜いた穴など、礎石を据えた痕跡も確実なものは発見されないことを確認した。

従ってこれらの石は礎石ではなく、建築遺構も存在しなかったと考えるかまたは埋没している石の周辺に焼土や木炭が存在したことから、前年度想定したように礎石群があったとみるべきか依然として疑問は残る。もしこれらの石が礎石であるとすれば建築遺構は発掘地点より離れて南に寄っていたことも考えられる。また考えようによっては発掘地点にあった構遺が、その後の開墾耕作によって礎石を抜きとった



第3図 第5トレンチ

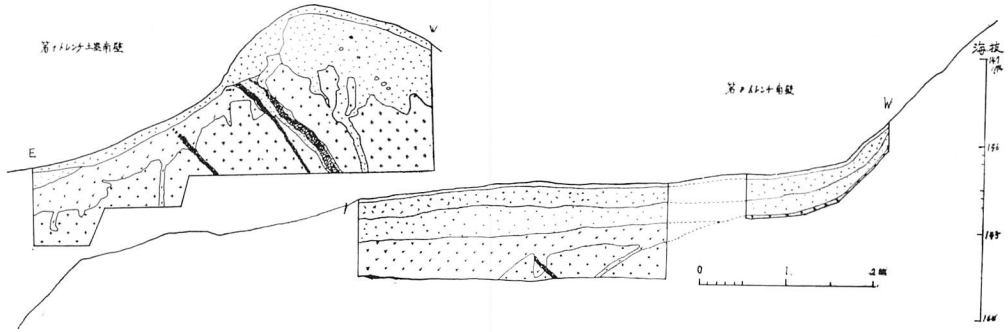
跡までも消失してしまったともみることができる。目下のところ積極的な根拠はないが、現地の平坦部は土を掘りひろげ、ことさらに地積を拡張した形跡が認められるので、おそらく本来建物があったとみるべきであろう。



第4図 第7トレンチ

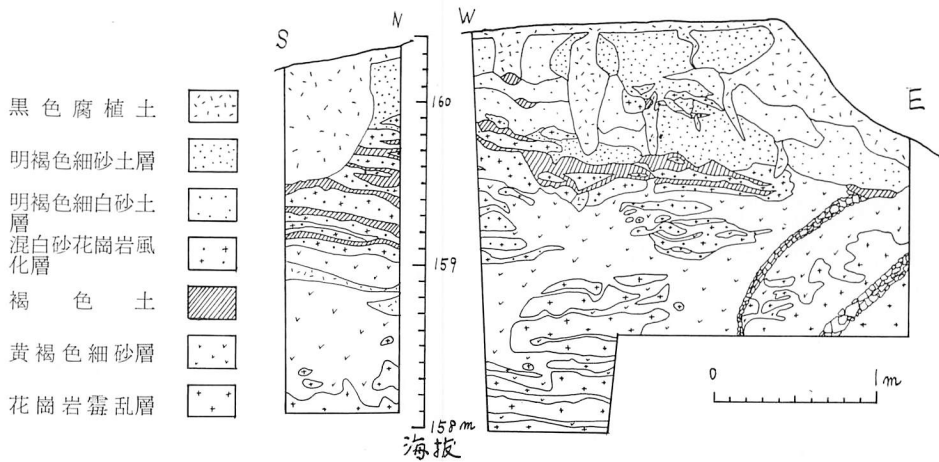
(2) 土 塁

佐官どんにおける土塁は自然の尾根を加工してつくられたらしく、外側は切り落しによる断崖をなし、深い谷にのぞむ。土塁の内側には車路が設けられ、その内側は段状の斜面をなす。今回の調査には土塁の北端から約15m南に寄ったあたりに長さ4.5m、幅0.8mの第7トレンチを設定した。トレンチ内に第は表土下約20cmに3条の石英の細い岩脈が見られ、(第4図)それが残る部位までは攪乱されていないことが明らかである。さらに断面観察によると最下層の花崗岩霏乱層が最も高くなっている部位は、土塁直下でなくむしろ土塁の内側寄りにみとめられた。とくに自然層の一つである黄褐色細砂土層は土塁の外側において、あざやかにそぎ落した状態がみとめられた。同様な切り落しは土塁の内側にもみられた。したがって、佐官どん地帯



第 5 図 第 7、8 トレンチ土層実測図

における土塁は、多くのばあい自然の尾根を利用して外側を急に、内側を車路にするために、切落しながら構築したことがわかる（第 5 図）。しかし尾根が切れて平坦に近くなった北端付近では（第 6 トレンチ）石英の岩脈が尽きるあたりから、褐色土層を交じえた各地層が縞状に横たわり明らかに盛り土であることが判明した。



第 6 図 第 6 トレンチ土層断面図

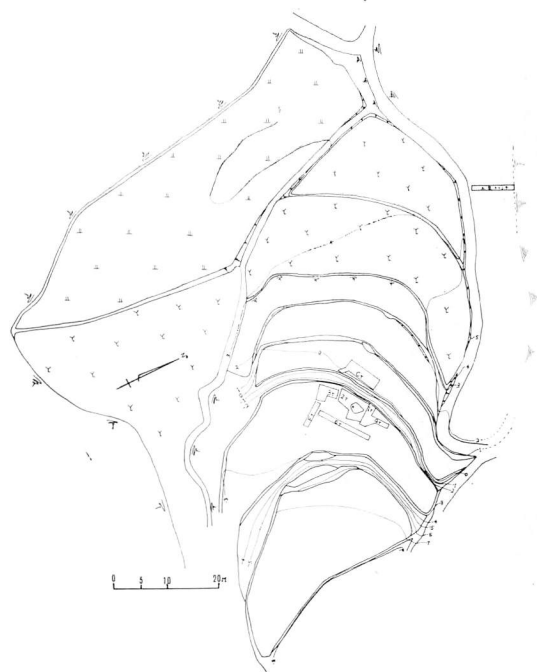
このように佐官どん一帯では、尾根の外側を切落し、或は土盛りしているところから、これが城をまもるための土塁であったことは間違いないものとする。（田辺哲夫・緒方勉）

Ⅲ 深迫門礎地区

本年度は、昭和42年度の調査において、次年度の課題とした、城外から城門に達する道路を発掘により確認することと、門礎北方にあたかも城門に接続するかのごとく伸びる尾根に注目して、発掘によりこれを確認すること。に調査目的を限定した。

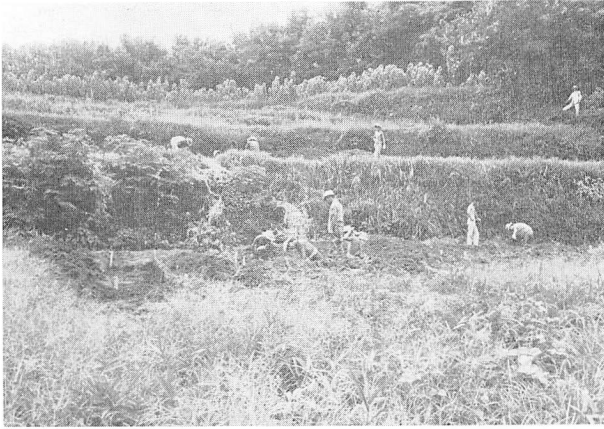
この地区は42年度の発掘成果で、いくつかの所見が確認乃至は推定されているが、今次調査に必要な部分のみを摘記する、註1

- (1) 門礎、(長径2.68m短径2.26m厚さ80cm以上)は、多少の傾斜はあっても、原位置に近い位置にあると考えられる。
- (2) 柱根につくられた出納を、納穴に嵌入して門扉を廻転する柄穴礎石であることは確実であるが、回転方向は納穴の磨滅状況等から考慮すれば、門扉が後に開く「内扉」であったと推定される。
- (3) 対称位置に門礎があるのかどうか、あるいは片袖式であるのかなどの点については、明確にできなかったが礎石西側の地区において、礎石をぬいた根石群と思われる石群を発掘した。その間隔は柄穴中央より5.8m(唐尺19尺)である。礎石東側地区は日数の制限上未発掘。
- (4) 上記の門礎石と推定根石との間はピンクに近い硬質粘土で、人為的な盛土ではない。内法幅3.6m(12尺)。この面で土師器の細片を得た。
- (5) 推定根石に近く径30cm深さ34~40cmのピットを検出したが、これはあるいは礎石に附属する柱穴であろうか。
- (6) (4)以外の遺物は礎石下から布目瓦3片を検出した。
- (7) (4)のピンク色の硬い地山面を両門礎間の路面と推定し、礎石北方の崖面にわずかに認められるはり出した部分4箇所注目し、城門から城内平坦部に達するには、曲折急坂の多い道を上下するよりも、いくつかのステップをもつものではあるまいかと想定した。



第7図 深迫地形測量図(昭42-43)

上記(3)においてのべたごとく、門礎石の



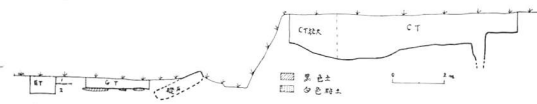
第 8 図 深迫門礎石発掘風景

東側地区は未発掘であったので、本年度はその地区を含めた所謂門外の地区3箇所（E・F・Gトレンチ）と門内にあたる礎石上段の地区（Cトレンチ）を発掘し、上記諸点の解決に一步近づこうとした。以下調査結果を地区別に概観する。

1 門 礎 石 地 区

Eトレンチ（1×11m）

東側面の観察によれば、土層には特別の変化はないが、地表下20—30cm前後で硬度によって上下層に分離される。部分的には3層まで区分出来るが、この層はより粘質が強い。注意すべきは地表下マイナス35cmで刀子片が出土したことである。今のところ硬い面を当時の地表面とする積極的な証左はないが、その可能性を全く否定するものではない。後に述べるGトレンチとの関連は第9図のごとくである。



第 9 図 CGEトレンチ断面図

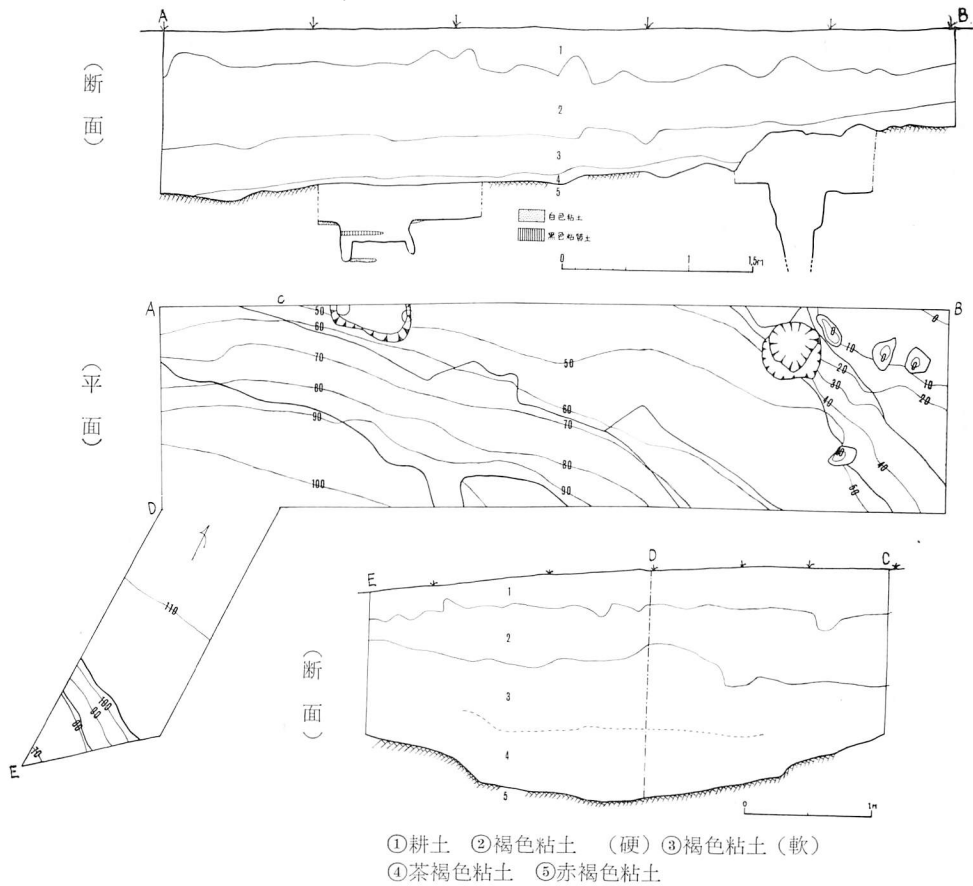
Fトレンチ（1m×5m）

Eトレンチに直交するごとく設定したが、特別の変化は認められない。Eトレンチの第2層は本トレンチの第4層に対比される。

Gトレンチ

42年度トレンチに接して、東西に4mのトレンチを設定しさらに図のごとく拡大した。その結果は、礎石を発見することはできなかったが、門礎石端より約50cmはなれて、黒色粘土と白色粘土があたかも圧延されたような状況で検出された。前者は現今農家の土間に見られるタタキのような堅さと黒さを持ち、厚さ5—16cmを測る。後者は前者にくらべ薄い塊状の白粘土をたたきつけたような面であり硬い。また塊状のブロックの痕跡が残っている。そして断面図には出ないが白色粘

土の下に黒色粘土が認められる部分もあり、版築状を呈する。以上の所見を門礎石とCトレンチの関係で見れば、第9図のごとくなる。版築状の白・黒の硬質粘土は門礎石と無関係とは考えられないようである。近世陶片一を得たのみで、関係遺物はない。



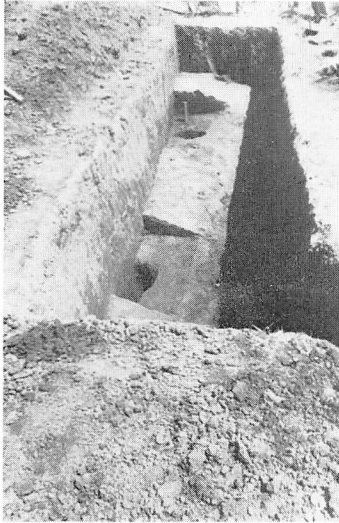
第10図 Cトレンチ平面、断面図

Cトレンチ (6.6m × 2m. 第10図)

当初は崖に沿ってA・B・C・Dの4区を設定したが、労力の都合上最重要と思われるCのみを発掘し他は割愛した。また問題を解決するポイントとなる崖面の掘開も中止したが将来かならず実施すべきである。トレンチの位置は門礎石の位置する畝地より比高約3mを測る。

発掘中地表下マイナス70cm—160cmの間に土師質土器3片・刀子片1などを得た。その外凝灰岩礫片が若干同じ深さから検出されている。この数値は後述の第5層に近い数値である点は注目される。完掘の結果、硬質の赤褐色粘土層(第5層・地山)を全面に亘り露出し得た。(第10図)この層

は北に高く南に低いという遺跡の自然地形に通じているが、トレンチの南東隅部に長さ約3mの幅



第11図 Cトレンチと柱穴

の狭い平坦面が認められたので、さらに拡大した結果、マイナス1.10mを最低位として、再びこの面は対称方向に高くなっていることが確認された。これを第10図でいえば図のマイナス90cm近くの実線と拡大区のマイナス1m下の実線の範囲である。その幅は約2.8mである。横断面で示せば第10図C-D断面によく認められる。この浅い凹字状の平坦面はかつての道路ではあるまいかと調査者らは考えたが、僅か6m余のトレンチ内での所見であるので結論はひかえたい。たまたまその想定を助けるものが、いわば道路ののりに相当する部位に発見された、柱穴と思われる2箇所のPitである。(第11図)

第1号Pit (トレンチの東側)

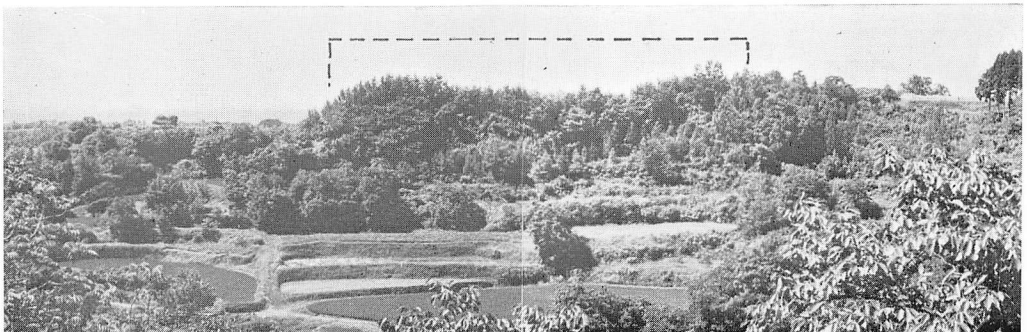
平面形は円形に近いが、2段にくびれている。上位の径は45~46cmを測り、深さ35cmでくびれてせまくなる。底は不明瞭であるが深さ55cm以上である。上位のPit内には軟質の黒褐色土が充満し、下位にはより粘質の強い黒褐色土がはいっていた。またPitの縁まわりの土に白粘土まじりの斑点が混在するのは注意される。

第2号Pit (トレンチの西側)

壁面に接して落こみがありその底に2箇の小形のPitが認められた。うち西側のものはやや内傾する。落こみの平面と断面には、白・黒粘土の薄層が交互に認められるが、黒色は硬く白色は軟かい。第1号と第2号(両Pitの中央)の間隔は約3.3mである。

2 深迫土塁推定地

門礎石の北方は俗称馬コカンに至る隘道によって現在は切断されているが、元来は一連の尾根で

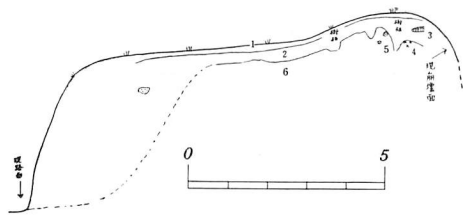


第12図 深迫土塁推定地を北方(三枝石垣)より望む

あった尾根が台地から派生して、門礎のある深迫の谷とその北隣の谷との境界を形成している。尾根の先端部は門礎石と直距離20数mにすぎない。道路によって切断された以東の尾根は長さ約90mで、城外側は20m以上の急崖をなし谷に移行しているが、この崖面の崩壊はきわめて新しいものである。尾根幅は調査地点で約8mを有する、上記の急崖のみがやや高く（高さ50~70cm幅1m）しかも断続的に尾根と同方向にいくつかみられる。しかしてその内帯は平坦で削平されている。

調査は、こうした地形が土塁として当時構築されたか否か、言い換えれば土塁として扱ってよいか否かを、発掘によってたしかめることを目的とした。われわれは調査区域を深迫推定土塁と仮称することにした。

1m×7mのトレンチを尾根に直交するごとく設定し、地山に至るまで掘開を試みたが、日時不足で後述のごとく完掘できなかった。長側壁（北側）断面では、地山（第6層）の上に黒褐色粘土（第2層）表土層（第1層）の順でのり、第2層の東端には含白色粗砂粘土とピンク色の薄層が少量認められる。（第13図）ここで注意すべきは第6層が東端から約7mの地点において深さ約2m



第13図 深迫土塁推定地断面図

1. 表土
2. 黒褐色粘土層
3. 含白色粗砂粘土
4. 炭化物
5. 黄褐色粘土塊
6. 茶褐色粘土層

掘っても認められず、時間不足のために完掘できなかったのは残念であるが、図示推定のごとく現路面とあるいは接続するのであろうか。現路面は坂道のため流水などにより地山が露出している。もし土

塁とするには城内側をけずり取る方が工事上からも首肯されようとするれば、前述地山が急に深くなるのは注意すべき点である。

現在のわれわれが見る地形は、城外側がやや高く内側は平坦であるので、戦術上防禦しやすい地形であるが、それがただちに7世紀の地形に通ずるものではない。この台地の地質が崩壊・裂隙を生じやすい地質であることは既に地質学者の説く所である。崖側の高さ50~70cm幅1m位の丸みをおびた高みを土塁とするには賛成できない。成因つまり背後の崩壊を考えれば明白であり旧地形についての手がかりもな



深迫の発掘光景

い。つぎにつづく6m余の平坦部もきめ手はなく、植林、畠地などによる開墾の疑ももたれる。以上やや否定面をのべたがそれはあくまでもこの地区に関してであって広域に亘る鞠智城に土塁が存在しなかったというのではなく、大規模な発掘によって、証明されるまでは、深迫土塁に関しては視野を転じてさきに指摘したごとく、門礎と尾根が直距離20数mの近距離である点を重視して、おそらく城門に接する自然地形は築城に際して利用されたであろうという程度に理解しておいた方がよいと考える。

3 遺 物

各トレンチで得られ遺物を表示すると下表のごとくである。

遺物一覧表 -95などはマイナス95cmを示す。

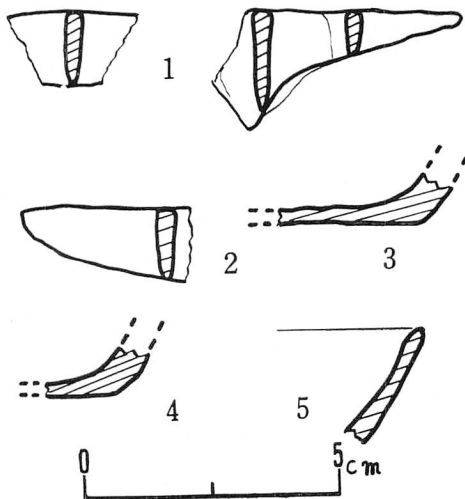
C				E	F	G
1 区	2 区	3 区	拡張区			
呉須付陶片 (ヤヨイ時代底部 その他1) - 95	土師質 2片 - 70 " " 1片 - 115 " " 1片 第三層	刀子 1片 - 70 (第10図-2)	土師質底部 - 170 " " 口縁部 - 170 (第10図-4.5)	刀子片 - 35 (第10図-1)	(縄文 石鏃)	陶片 1
土師質小片片1-70 中世陶片 1片-50	中世陶 1片 - 50 土師質 1片 - 30	土師質 3片 第二層				

土器はすべて細片であり、器形を知ることがほとんどできないが、第14図の3、4は底部片であり底面には糸切りは認められない。5は口縁部である鉄製品として2箇の刀子がある。第14図1は

片関(カタマチ)である。

上記各項を要約すると、

1. 門礎石の背後4-5mの地点の、Cトレンチにおいて、浅い凹字状の平面を検出し得た認められた長さは約3mにすぎないが、幅は拡大発掘により約2.8mであることがわかった。限定された発掘面積ではあるが、その横断面形は第10図においてかなり良好に看取される。調査者は断定をさけながらも道路ではないかとの想定をもった。その考えを支持するのは、刀子、土師質の土器片の出土と、道のりに相当する部位で検出された柱間3.3m pitである。しかも白・黒の粘土を版築状に使用している。



第14図 遺物実測図

2. 上記の今次の推定道路は、門礎石の位置と関連する。昭和42年度の所見として、既述のごとく礎石西方の城門を通る推定道路がある。これと今次のそれはつながるのか否か。本年度の発掘所見からは関連づける材料はない。
3. この問題を考える上に見のがせないのは、Gトレンチにおける、版築状の遺構である。これを路面の一部と見るか、礎石に伴なう遺構と見るか問題であるが、もし前者とみた場合、東側対称位置に第二の門礎石があることになるが、今までの発掘では発見されていない。そこで第三の考え方として崖の中にそれがあろうとする推理が生れる余地が生ずる。
4. 上記1～3の問題を解決する有効な方法は、現門礎の位置する畠地と比高3mの上段畠地の境界をなす崖を発掘すれば、問題は解決することになる。
5. 土塁について。そうであるという確証は今のところはない。けれども築城計画にとり入れられたであろうことは十分に想定できる。深迫に限らず、米原地方では地質学的な証明と後代の地形変改を考慮に入れることを忘れてはならない。(三島 格)

註1. 三島格「深迫の門礎石」『昭和42年度埋蔵文化財緊急調査概報、伝鞠智城跡』熊本県教委
昭和43年 熊本。

本遺跡の調査には鏡山猛教授の御指導を得た。記して感謝申上げる。なお実測図は佐藤伸二・隈昭志・緒方勉・亀井明德・中村幸史郎・松本健郎氏らによるものである。

IV 土 塁

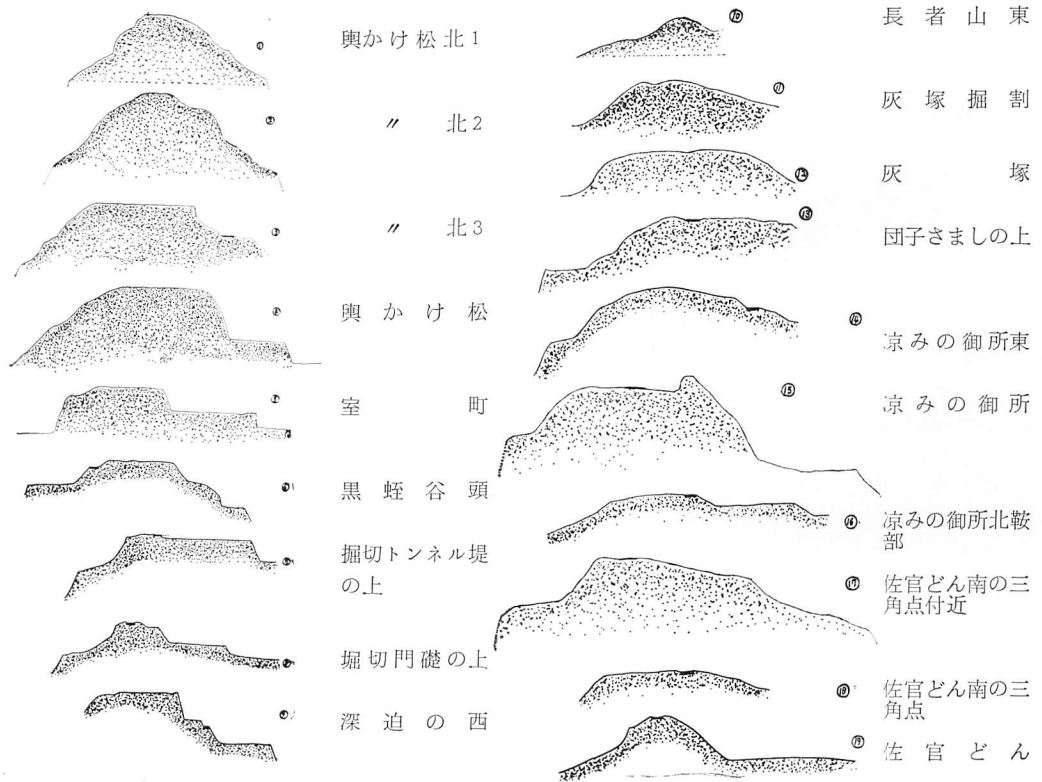
鞠智城の外周を明確にするためには土塁線の確認が必要である。第一年度の調査では一応の外郭線が推定されたのであるが、今回の調査目標はさらに土塁線の断面を計測することにより、推定の段階から一歩進めようということにあった。そのためには現在地表にあらわれている土塁の状態をそのまま計測しなければならない。今回の調査は土塁線と推定される箇所単なる断面計測だけに終わった。これを証明するためには土塁線を実際に切断しなければ明確に断定できないそれでも実測図によって一応の分類ができる程度の資料だけは得られた。

計測点の設定は調査員協議のうえ、比較的原形を留めている場所をえらび、かつ各地点間の距離的にみて必要と認められる所をえらんだ。設定した地点は以下のとおりである。

初田川と木野川にはさまれた松尾神社の東側の尾根(興かけ松～室町)、米原部落の西方に連なる「長者山」から「佐官どん」にいたる峰。その外郭とみられる頭合の南東部の谷頭、さらには谷頭から堀切に至る線など、合計19箇所である。

これらの土塁または土塁とみられる施設は、規模も形も地点によってまちまちである。このこと

は鞠智城の外郭施設があくまでも天然の地形に依存し、これをそのまま利用または加工したことによるものであろう。



第15図 土塁実測図

まず米原部落の西側を限る、佐官どんから長者山にいたる尾根に構成された土塁線についてみると、頂部の幅は必ずしも一様ではない。広いものは約15m、せまい所では数mにすぎない。これらの土塁断面を実測すると、およそ二種に大別される。すなわちA型は山の尾根の外側と内側を切り落して懸崖にしたもので、尾根の頂部は平坦な面となり、その断面は梯形を呈する。B型は山の尾根の外側、つまり城外側を急傾斜に切り落とし、城内側には犬走り状の車路を設けるものである。そのばあい城内側は比較的ゆるやかにつくられている。

その点本分部落の裏手「輿かけ松」一帯の尾根にみられる土塁らしい遺構は、幅約15m~20mもあり、上面が平坦で、はたして土塁として意識的につくったかどうか疑うむきもある。しかし城の外側が急な懸崖となり、内側の傾斜がゆるやかであるところから、天然の地形を部分的に加工しながら、外敵に対する防禦線として最大限に生かしたのではなかろうか。

以上の知見はあくまでも現地地形観察と、実測作業の成果にもとづく推論であって、鞠智城成立当時の地形が現在のままであったとは考えられない。何ぶん米原部落を中心とする周辺地形は、



第 16 図 奥かけ松付近景観

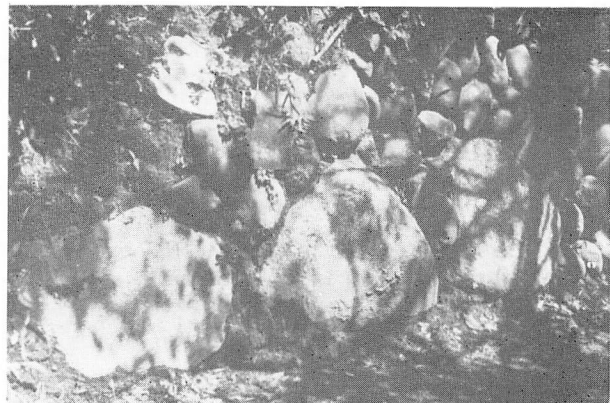
きわめて崩壊しやすい土質で、今でも年々大きな崖崩れを生じる始末である。現在のところ米原部落の西側を限る長者山～佐官どんの峰にいたる断続的な土塁と懸崖は、おそらく築城当時のおもかげをとどめるものと思うが、他の地区についてはさらに精密な調査を必要とする。

(坂本経善・隈昭志・杉村彰一)

V 阿高の礎石群推定地

鞠智城の南城は掘切より池ノ尾につづく崖線をもって限られる。その延長は頭合から黒蛭につづく尾根につながるものようである。ここにのべる阿高の礎石と推定される自然石群は、本分部落より初田川橋を経て黒蛭部落にむかう途中、県道から約 300m 北にむかって上った畠道の両脇にある。

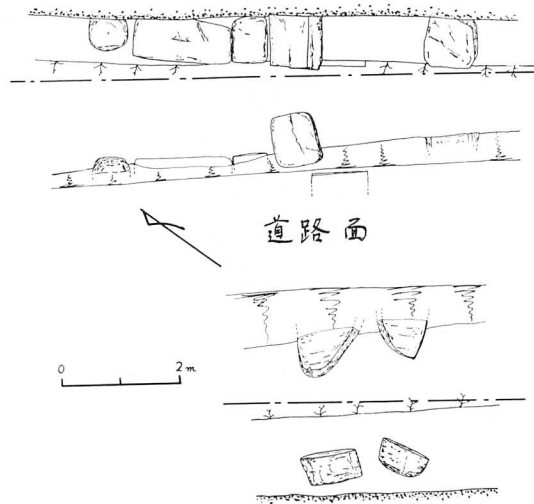
現地は標高約 70m を有し、なだらかな斜面が急斜面に移る地形の変換地点付近にあたる。これより道は幅せまくなり、爪先上りの坂道が山の尾根へむかっている。この尾根の北側を流れる溪谷の谷頭に「池尾の門礎」があり、あたかも尾根は鞠智城の外郭線の役目を果たしている。



第 18 図 阿高の礎石

石材はいずれも質のよい花崗岩の自然石で、道をはさんで北側に 6 個、南側に 2 個、いかにも意

味ありげな配置をなしている。各石材は上面が平らかですわりがよく、もちろん原位置から移動していることはいうまでもない。石材の大きさは一辺の長さ約70~90cmの立方体に近いもの4個、長さ80cm以上、幅約80cm、厚さ40~50cmを有するもの2個、長さ170cm幅80cm、厚さ不明1個、大きさ不明1個からなり、完全に露出するとさらに歩確な数値が得られるであろう。何ぶん現地は農地にいたるテーラーの幹線道路であるため、発掘できなかった。はたしてこれらの石材がいかなる建物配置を構成していたものか、現段階では推測の域を出ない。或は単に後世の石工が、山から掘り出した姿のよい石材を運び出し集積放置したのかもしれない。とにかくその実態究明は、今後の調査計画の一つとしてとりあげることにした。(限 昭志)



第17図 阿高礎石群

VI 小 結

以上のべたとおり、昭和43年度（第2次調査）における鞠智城の調査は、短期間に集中的作業を遂行したにかかわらず、従来疑問視されていた多くの問題解決の端緒を得た。即ち、佐官どん地区においては、建造物遺構の存否をめぐって、対立的な考え方が残るが、現地の地積、発掘調査の成果から何等かの遺構が存したことは明らかであろう。特に、佐官どん地区における土塁は天然の地形を城外側は切りおとしにして懸崖を作り、内側には犬走り状の車道を設けるなど、明らかに人為的な遺構が確認された。更に、土塁の延長線上には土盛りをし、人工的な遺構が認められた。

深迫地区においては、初年度以来の懸案であった城外から城内にはいる道路進行方向の確認に重点がおかれ、その遺構と見られる断面がU字形を呈した地山のおちこみや、掘立柱らしいものの遺構も検出され今後の調査に明るい見とおしがたつに至った。

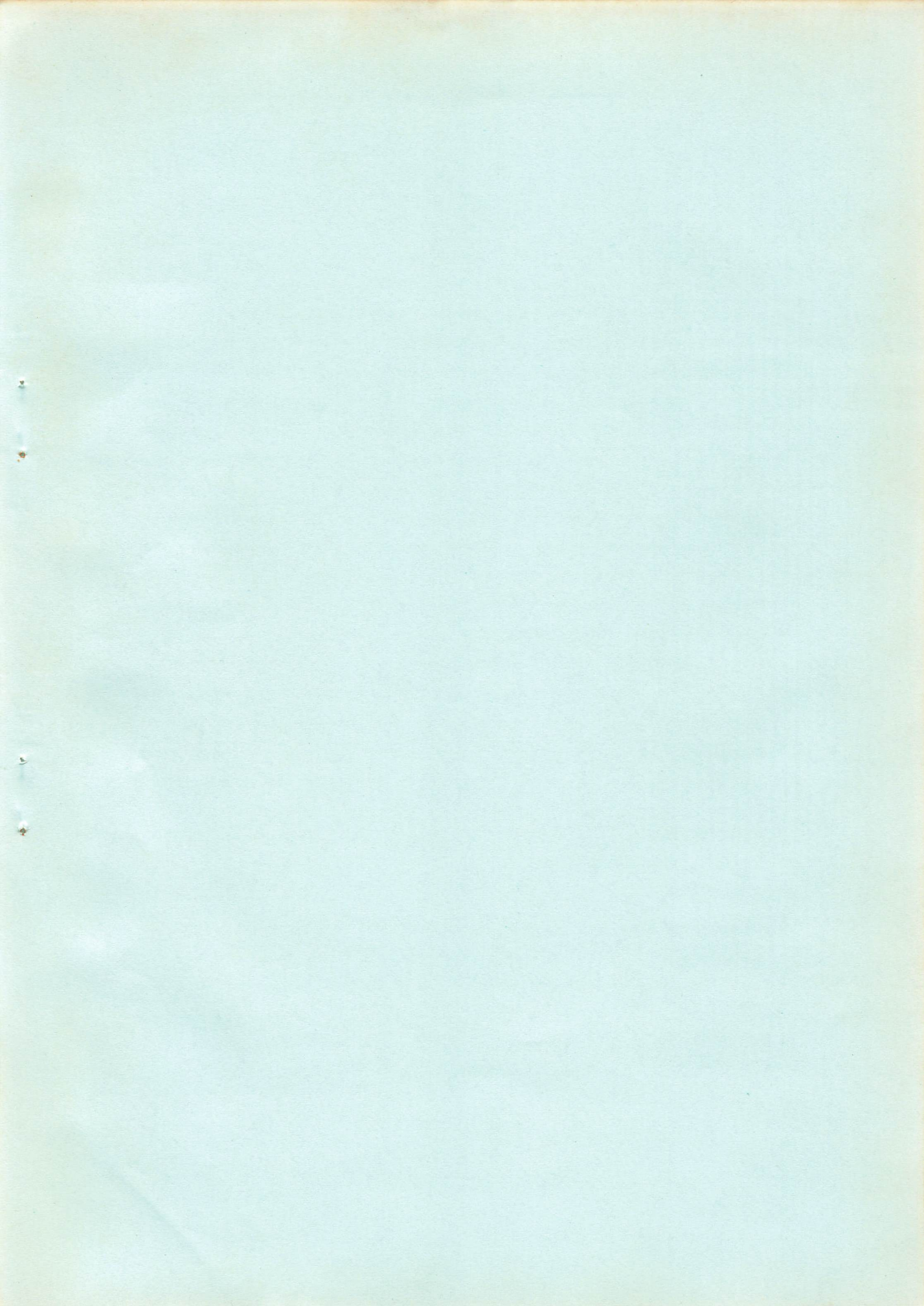
次に鞠智城をめぐる土塁線については、現地一帯の土質がきわめて崩壊しやすい花崗岩の風化土壌と、軟質凝灰岩からなるために、現在でも年々大きな崖くずれを生じる始末である。したがって、これら土塁線の確実な遺構を把握することは極めて困難な作業であった。しかし、米原部落の西方を限る長者山～佐官どんに至る尾根状に断続的に見られる土塁線は、おそらく築城当時の面影をとどめるものと思われる。その他、頭合部落^{つどう}の北東部、掘切より黒蛭方向に続く尾根には人工的な土塁遺構こそ発見されなかったが、通称阿高の山道にかかる農道の両脇に礎石にふさわしい花崗岩の石材8個が堆積していた。これを建築遺構の名残りとするか、単なる石材の集積と見るかについては大きな問題として残るが、今後の調査計画の一つとしてとりあげたい。

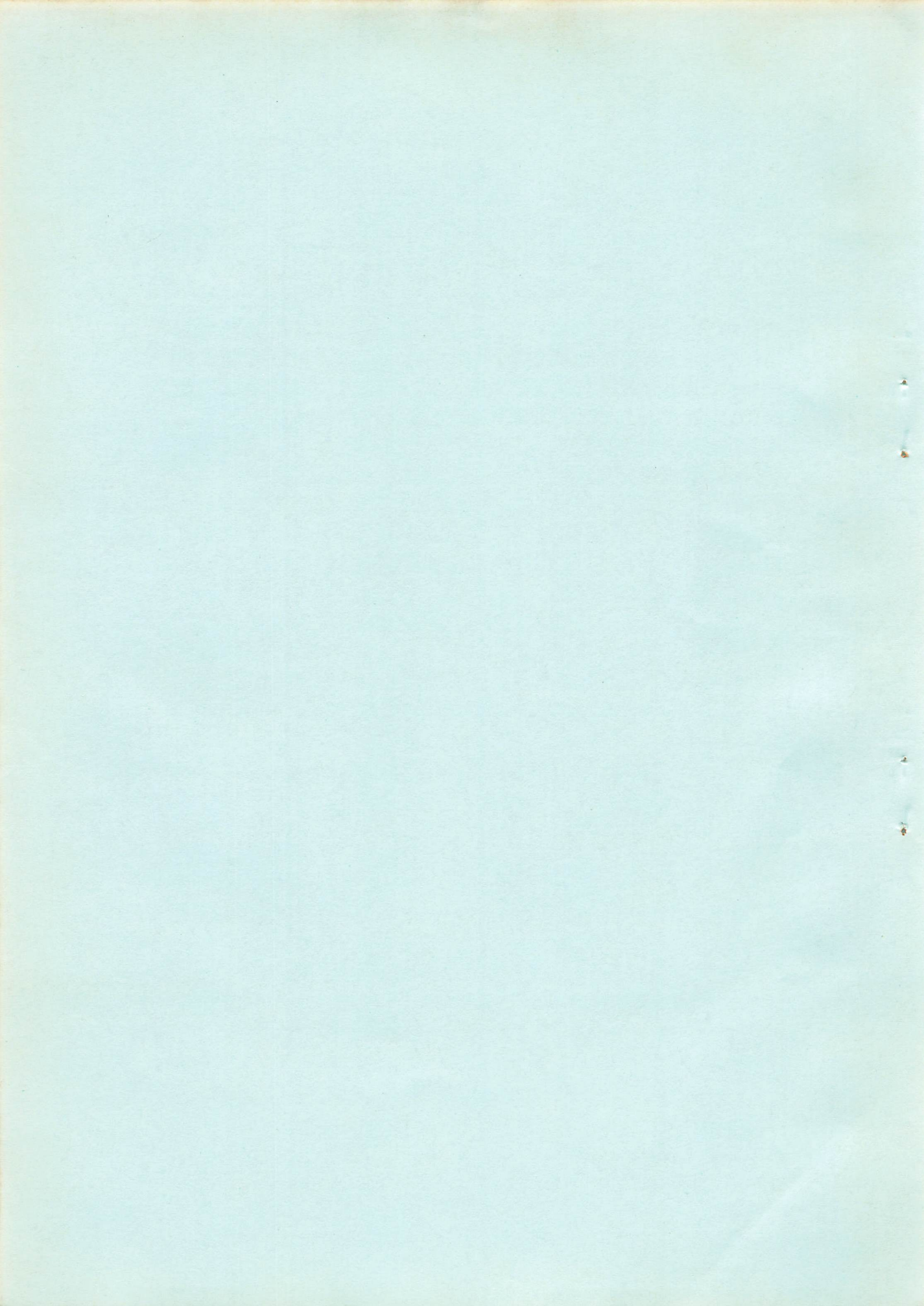
来年度の調査には

- (1) 鞠智城全域の確認
- (2) 長者原における礎石群の露出と実測
- (3) 池ノ尾門礎および石積群の発掘
- (4) 宮野礎石群の露出と実測
- (5) 紀屋敷、小監どんの実態把握
- (6) その他、第1、第2年度の補正調査

などが残されている。

これだけの調査が完遂されても鞠智城に関する問題点は完全に解明されたとはいえない。今後といえども、問題意識を新たにしながら継続的調査と研究がのぞまれる。（乙益重隆）





三万田遺跡調査概報 目 次

I	調査経過の概要	1
II	過去における研究	2
III	三万田遺跡の地理的位置	2
IV	発掘調査の概要	4
	(1) 試掘坑の設定	4
	(2) 試掘坑における調査成果の概要	5
V	遺 構	6
VI	遺 物	8
VII	小 結	11

Ⅰ 調査経過の概要

三万田遺跡は三万田式土器の名と豊富な遺物出土地として古くから知られている。遺跡の発見以来、ここを訪れた人の数も採集された遺物の量も莫大な数にのぼる。しかるに従来局部的な発掘調査は行なわれたが、遺跡の全面的な学術調査による掌握が行なわれていなかった。

昭和43年、泗水西部区県営圃場整備事業が計画された。この計画が進行すれば三万田遺跡一帯の地貌は変わり、遺跡は全域完全に壊滅することになる。こうした計画から遺跡地区を除外し、現状保存を計ることが埋蔵文化財保護の上からは最も望ましいが、何ぶん広大な面積にわたり、地元、土地所有者の利権もからんで実施が困難であった。この遺跡は元来表面採集によって確認されたものであり、遺構の所在地点は明らかになっていない。遺跡全域でなく重要地点の保存を計るためには遺跡、遺構規模、分布状態についてできる限り、くわしい資料が必要である。今回の調査はこのような基礎資料の収集を目的としたものである。

調査については昭和43年度埋蔵文化財緊急調査費の国庫補助をうけて熊本県教育委員会が主催し地元泗水町教育委員会と共催して行われた。

現地調査は昭和43年7月27日から8月3日までとし、下記のとおり試掘坑調査を主体として遺構、重要地点の発見に主力をおいた。この期間中天候には恵まれず、阿蘇火山灰土の粘着度の強い土に苦しめられたが、一応今回の開発工事保護対策に必要な資料を得ることができた。

そして、この調査結果をもとに、施行者側、地元関係者、地主等関係者と協議した結果、遺構所在区域については、大幅な計画の変更が承諾され、重要遺構所在予想地区についても、地域を限定して保存されることになった。

なお、本遺跡の調査には、坂本経堯（肥後考古学会長）、隈昭志（鹿本高校教諭）、杉村彰一（鹿本高校教諭）、平岡勝昭（小国宮原小教諭）、富田紘一（熊本博物館学芸員）、植島弟四郎（泗水町文化財保護委員）、上野辰男（県社会教育課参事）が担当し、鹿本高校、鹿本商工高校、他鹿本高校出身の大学生等多数が補助員として参加した。調査の組織運営は、県社会教育課長重石隆三、課長補佐木村繁、文化係長松田安雄、主事富永久、主事高浜知完らとともに、泗水町教育長大島義人、主事稲田誠也があたった。この調査には増田泗水町長、坂本則雄三万田部落区長をはじめ、三万田部落民、遺跡地に土地をもつ数多くの地主諸氏、泗水町文化財保護委員、泗水中学校松岡先生や生徒諸君など泗水町関係者の他、乙益重隆熊本女子大学教授、緒方勉氏、古田紀子氏ら数多くの人々の協力と援助があったことを、お礼と共に申しのべる次第である。（上野辰男）

Ⅱ 過去における研究

三万田遺跡のことが研究者の間に知られるようになったのは古く、昭和の初年にさかのぼる。坂本の記憶によると昭和6年の夏、菊池西部実業学校の夏休み課題に坂本則雄、吉岡吉春らによって提出された土器、石器が遺跡発見の端緒となった。

昭和6年11月大阪毎日新聞社長本山彦一氏の学術研究費をもって、坂本がこの遺跡最初の試掘をおこなった。その後、昭和9年8月、熊本市宝積会の補助をうけて第二次調査が実施された。これらの調査によって、三万田遺跡の包含状態が明らかになるとともに、土偶をはじめ、多くの土器、石器等が採集された。この調査で出土した主要な遺物は調査報告とともに本山氏に送付されている。

遺跡発見以来、三万田遺跡を訪れた研究者、蒐集家の数はおびただしい数にのぼる。そうした人達に持ち去られた遺物の量も少くない。こうした遺物の散逸を憂い三万田居住の増田末八氏は私費をもって遺物の収集につとめたが、その資料は現在鹿本高校に移管保存されている。又、菊池市田中儀信、川上勇輝、大塚了城氏等も収集につとめ、三万田遺物研究の資料として利用されるようになった。こうして収集された遺物は量において多いのみならず、種類も甕、深鉢、皿、注口土器高坏をはじめ、遺跡南地区で多く採集された原始勾玉、北地区に多い土偶等内容でも多彩である。このような基礎資料をもととして、当初御領式土器の分野に入れられたここ出土の土器に対して、三万田式土器という一形式が設定された。その後昭和20年代になって、文様、器形等が、細分され、三万田式土器の内容が明らかになった。

三万田地区で出土する土器は三万田式土器が主力をなし、数も圧倒的に多いが、他に押型文、西平式、御領式、黒川式の縄文土器と弥生式、古墳期土器も見られる、ここは長い生活の場であったと思われるが、全域調査が、なされていないので、そうした遺構さえ、明らかでなかった。遺跡の全貌が明らかにされたのは今回が最初のことである。（坂本経堯）

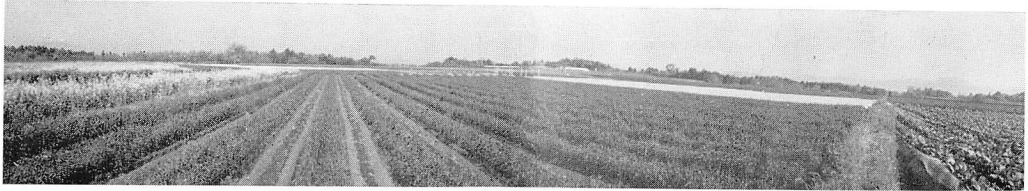
Ⅲ 三万田遺跡の地理的位置

阿蘇山の外輪は周辺になだらかな裾野を広げ、台地地形を形成している。その台地には数多くの遺跡群が存在し、古くから注目されてきた。この三万田遺跡は外輪山の一つ、鞍岳の西方約15kmに存在する。このあたりになると標高約80mの平坦な、いわゆる花房台地と呼ばれ、北は菊池川の沖積低地によって限られ、隈府・山鹿盆地の東端に接する。一方南には狭小な合志川の谷が台地を限って東方に伸びるので、三万田を含むこの花房台地は西方に向って発達する舌状の台地の一つとなっている。しかし、この低平な台地も三万田より以西になるとさらに小さな谷が数条発達して、起伏もいちじるしくなるので、鞍岳から広がってきた起伏の少ない地形は、この三万田あたりまでということになる。したがって、戦時中にはこの地形を利用して、台地上に花房飛行場が建設されていたほどである。

さて三万田遺跡は行政上、菊池郡泗水町大字三万田東原に属し、東西に約500m、南北に約300mの広大な面積に広がっている。東限は旧飛行場の諸施設の残滓あたりで、県道熊本一菊池線に沿う熊本電鉄の富ノ原駅から西に約600mのところである。西は下三万田の部落へ下る傾斜変換線付近で、現在は数棟の鶏舎が建ち並ぶあたりである。北は大字東谷との境界付近で、小規模な谷間への斜面までといわれるが、現在なお雑木林などのまま、開墾されていない地域まで伸びるのではないかと推測されている。南限もやはり竹林や雑木林になっている傾斜変換線付近である。(隈昭志)



第 1 図 三万田遺跡位置図点 (斜線内三万田遺跡)



第 2 図 三 万 田 遺 跡 景

Ⅳ 発 掘 調 査 の 概 要

① 試 掘 坑 の 設 定

三万田遺跡における遺物の散布範囲は先述のとおり、東西約500m、南北約300mという広大な面積であるが中心地域を把握することが急務である。今回の調査目的は重要な地点の保存ということであるので、それをよりの確につかまねばならない。しかし、調査に要する予算的な裏付、調査日程、さらには調査員の人数など各種条件を考慮すると、万全を期した体制とはいえない状態であった。そのため以下に記述するような試掘坑による調査を実施することになった。

三万田遺跡の全域を一応地表から踏査することによって、遺跡における遺物散布状況を調べるとともに、過去に採集された遺物の散布をも参考にして、調査地点を設定した。つまり1,000分の1地形図をもとにして、地図上に東西、南北に直交する50m間隔の方眼を設けた。基線を東西方向にとり、Ⅰ列とし、それを中心にして南方にⅡ列、Ⅲ列…、北方にA列、B列…を設けた。さらに各列を東から西に1、2、…と区分した。したがって基線の場合は東から西にⅠ-1、Ⅰ-2…と並ぶことになる。結局こうして設けた方眼は南北10本、東西11本からなり、この交点を基準にして南北1.5m、東西1mの試掘坑を設定した。この試掘坑によって遺構の所在を明らかにするのはなかなか困難であるが、大まかな層序、遺物包含の伏態は把握できる。つまりその層序がプライマリーのものであるか、あるいは攪乱を受けているか、また包含層の深さ、保存の状況の良否が察知できる。各試掘坑の状況をさらに平面的な広がりとして把握すれば、一応の分布範囲が推測できるというわけである。こうして当初の計画によって掘られた試掘坑の数は55箇所であった。

50m間隔の試掘坑では見落としのある可能性が考えられるので、先の試掘坑の結果をもとにして、とくに遺物包含の伏態が良好な地点ではさらに50m方眼の中間地点に第2の試掘坑を設けた。Ⅰ-9-1とかⅡ-9-1などがそれであり、三万田遺跡の西南部にあたる地点に計7カ所を設けた。したがって初めの試掘坑と合計すれば62カ所の調査を進めたのである。(上野辰男)



第 3 図 試掘坑分布図 □ 試掘坑

② 試掘坑における調査成果の概要

調査の目的は先述のとおり、保存するための地点をつかむことである。したがって試掘坑の調査にあたっては、

(イ) 層序が攪乱されていた場合は一応基盤まで掘り下げて遺物の有無を確認した。

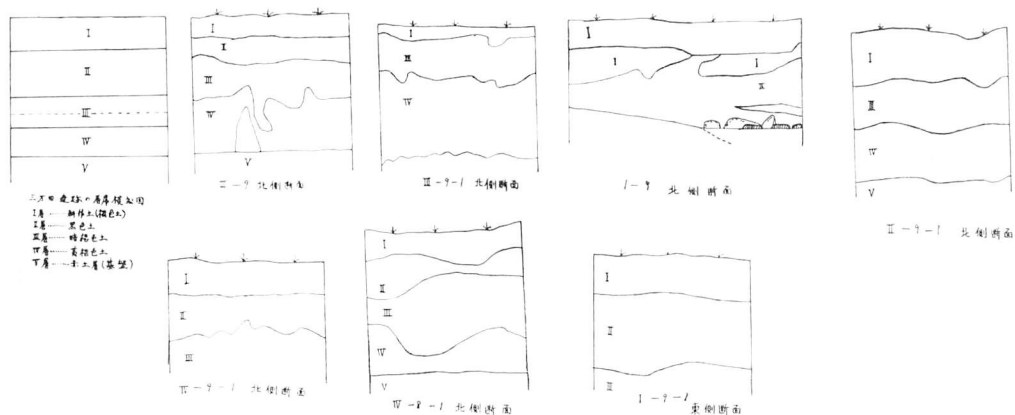
(ロ) 層序が攪乱されず、遺物が多量に出土した場合はそこで調査を中止した。

別表の〔各試掘坑の出土遺物一覧表〕は調査によって、遺物や遺構の出土をみた試掘坑の一覧表で

ある。以下簡単に結果を述べることにする。

広大な面積にわたって、従来遺物が採集されてきたが、層序の攪乱が比較的少なく、遺構の存在が可能と推測できるのは、遺跡の西南部一帯である。方眼のマス目であればおおよそ南北線では7～10と東西線ではI～IVとによってかこまれた範囲である。ほかの試掘坑でも遺物は検出しているけれども、土層の攪乱がいちじるしく、まとまった遺構を検出する可能性も少ない。この結果は表面採集による打診とはかなり異なり、地表で遺物が多く目につく所での包含層の状態はあまり良好とはいえない。むしろ今まで遺物の少なかった地域こそ重要な地点が多いといえそうである。

(杉村彰一)

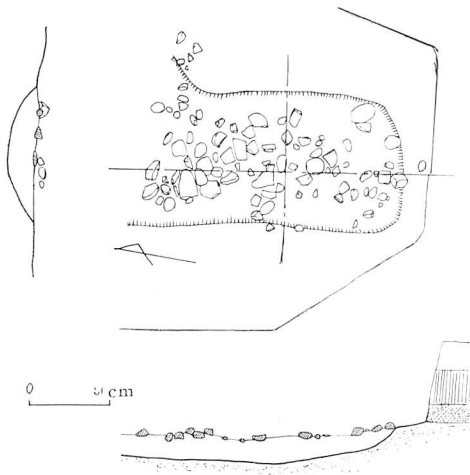


第4図 土層断面図

V 遺 構

発掘調査というより予備的な打診調査であった関係から、遺構を検出した試掘坑は少なかった。それというのも多くの場合遺物がプライマリーの状態で確認できると、その深さで調査をやめているので、包含層を完全に掘り下げた場合にもっと遺構を認めることが可能であろう。また試掘坑そのものの広さもわずか1.5×1mのせまいものであるから、遺構にふれる度合も少なかったといえる。

遺構としていちじるしいのはI-9の例である。従来このI-9のすぐ北隣りの畑からかなりの量の三万田式土器が検出されていたこともあって当初から有望視された試掘坑であった。地表下約60～65cmの深さで河原石群を検出した。礫は小さいもので5～8cm、大きなものは15～20cmほどの大きさで、多く円礫のままで使用してあった。この試掘坑では上層でかなり層序が攪乱されていたが、この遺構を含む第III層はプライマリーの層である。河原石群の広がりも試掘坑の範囲内から、東側にのびていたので、調査の後半において性格をつかむために拡大して、礫の広がりを露出し



第 5 図 I-9 試掘坑遺構実測図

た。その結果は第 5 図に示すとおりである。礫群の広がりには南北に約 1.65m、東西に約 65cm のほぼ長方形になっており、配列には一定の秩序はない。礫群を取り除くとそこに土坑面を検出し、南北に少なくとも 175cm、幅約 85cm の、ほぼ隅丸長方形のプランらしいことが確認できた。(第 5 図) このような土坑の例は熊本県阿蘇郡西原村桑鶴で昭和 41 年、アルバート、モア氏らによって検出されている。この遺構の性格についてはいろいろ異論もあろうかと考えるが、おそらく礫を覆った積石土坑墓ではあるまいかと推測する。

そのほかの遺構としては住居址の床面ではないかと思われるものが I-3、II-5、II-7、で検出された。その中の II-7 は黒土層を固めたような状態で須恵器を伴っているので、須恵期の住居址ではないかと考えられる。(隈 昭志)



第 6 図 I-9 試掘坑遺構



第 7 図 II-7 試掘坑



第 8 図 III-9-1 試掘坑断面

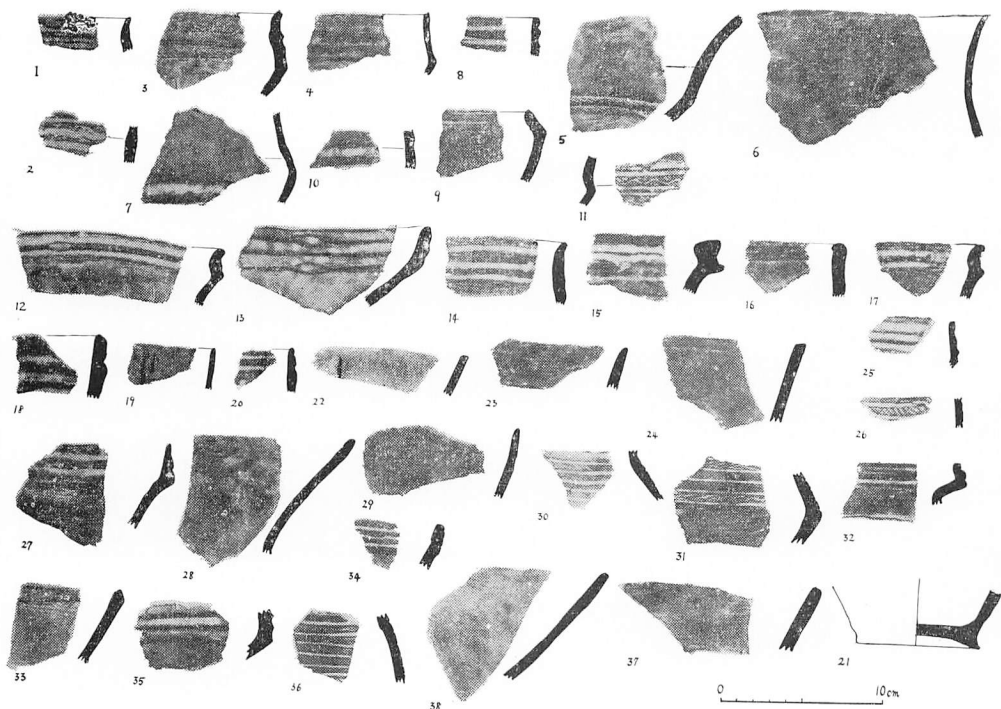
VI 遺 物

今回の調査で検出した遺物としては土器、土偶、石器があげられる。それぞれについて簡単に説明を加えたい。

① 土器 (第9図)

土器片ばかり多量に出土しているが、そのうちの大半は小破片であるため器形とか形式が分らないものである。ここでとりあげる土器片は器形など比較的わかるものの中でも、三万田遺跡の西南部から出土したものである。一般的な特徴としては粗製土器と磨研土器があるが、前者は深鉢またはカメ形土器が多いのに対して、後者は浅鉢形土器であること、また数の上からは概略して後者の方が多く目につくことが特徴であろう。磨研土器には有文と無文とがある。文様を有する土器は大きく分けるとつぎのようになる。頸部または肩部にスリ消し文をもつもの (第9図26) にはx字状に沈線が交叉するものがあり、条痕文の上に数条の平行沈線を施し、その間に波状の沈線を描いた文様 (同2, 11) などは、西平系との関連を推測させるものであろう。しかしいずれも口縁部の形状がはっきりしていない。

平行沈線に斜めの細線を施した文様は口縁の下部から肩部、あるいはくびれ部にみられる (同3



第 9 図 出土土器片拓影 1~2(III-9) 3~11(III-9-1) 12~18(IV-8) 19~21(IV-9)
22~30(1-9) 31~36(I-9-1) 37~38(II-9-1)

5、31)が、31の場合は肩部に棒状のもので平行沈線を施したのち、ヘラ状の施文具で雑な羽状文を描いている。このような手法は三万田遺跡出土の土偶の文様にも認められる特徴的な文様体といえる。平行沈線または隆帯状の文様体の上に押圧して施した楕円形の文様(同12、13)を有するものは黒色の磨研土器であり、文様形態からいえば、単なる平行沈線による文様との中間的なものといえよう。このような楕円形の文様をもつものは御領式土器にもみとめられるが、御領式土器としては裝飾上変化ある土器といえる。御領式土器の文様との関連上重要なものであろう。

以上簡単に述べたが、破片であるため器形がはっきりしないものもあり、時期的な差異を考慮することは無理である。(杉村彰一、隈昭志)

② 土偶(第10図)

A-6 試掘坑の地表下約 120cm の深さから出土した。この地点は三万田東原のゆるやかな斜面にあたり、層序をみても他からの流入堆積がいちじるしい。したがってこの土偶も出土状況から推測すると、他からの流入と考えた方が当をえている。

出土したのは土偶の頭部で、左耳から後頭部にかけては欠損している。顔面の形はほぼ円形を呈し中央部でわずかに張り出しており、半球形に近い形状をしていたものと思われる。頭部には鉢巻



第 19 図 土 偶 頭 部

のような一条の沈線が施され、眉目は同様に二条の沈線で描かれている顔面の下端部近くに小竹を押して付けた径4mmの口が認められる。また顔面から一段後方にさがった所に耳が付き、それには径2mmの小孔が穿ってある。全般的にいて粗雑な作

りで、胎土、焼成ともに良くない。

長さ52mm、顔面幅48mm、現在の頭の厚さ28mm。(上野辰男)

③ 石 器

石器は土器に比べて出土例が少ない。種類としては石斧、石鏃、たたき石、石錘などがあげられる。

石斧は打製が多く、しかも偏平なもので、安山岩と緑泥片岩を使用している。石鏃は概して粗雑なものが多く、黒耀石、安山岩製である。

その他石材の破片もかなりの量検出している。(限昭志)



作 業 写 真

Ⅶ 小 結

以上我国の考古学史上重要な意義を有する三万田遺跡の外貌は、今回の調査によって一応概況を把握することができた。しかるに、遺跡の内容は、局次的試掘のほか実態が明らかにされたわけではない。本遺跡を完掘しようとするれば、莫大な費用と、莫大な人員構成をもって、総合的に把握するべきで、これ程重要な遺跡は現在の時点において是非とも保存するべきものであることはいうまでもない。

すでに述べたように本遺跡の規模は三万田台地西端一帯にひろがる東西 500 m、南北 300 m の広範囲にわたり、その拠点と見られる地域だけでも約 30,000 m² の広域にわたることが明らかになった。そして、局次的試掘調査であったのにもかかわらず、今回は遺跡西部地区において積石土壙墓と考えられる重要な遺跡も発見され土器セットも従来知られている他に、複雑な内容を有することが、明らかになり、今後の研究成果が期待されるであろう。又、石器についても三万田式土器に伴出する礫器状打製石器の問題や、小型の美しい蛇文岩磨製石器、作りのあらい石錘、その他石皿、石臼、スリ石等残された問題が少なくない。とくに、三万田式土器文化に特有な、クジャク石で作った原始勾玉、その他、有力な装身具類については今後集成的に再検討しなければならない。又、九州では三万田式土器になってはじめて出現する土偶の問題にしても、その形式分類、製作手法、表現手法など今後検討するべき多くの問題をはらんでいる。

今回の調査は、土地開発の問題の対策としておこった、単なる事前調査にすぎなかったが、遺跡の実態把握と土器文化内容の究明についてその契機となれば幸いである。(坂本経堯・隈昭志)

(別 表)

試掘坑の出土遺物一覧表

列	試掘坑名	土層の 完攪 全乱 層序 ○×	出土遺物と層序()			遺構	その他
			土器	石器	その他		
I	4	○				住居跡床面? (III)	
			三万田式(II)				
	5	×	三万田式(攪) 5片				
	6	○	三万田式(II)		赤土層から 土器片出土		
	7	○	御領式多量(II)			礫群	積石土壙墓
	8	○	三万田式数片(II・III)	たたき石 (II・III)			
	9	○	三万田式少量(III)	石斧片 ² (II)			
	9-1	○	三万田式少量(II)				
	10	○	三万田式少量 (I・II・IV)				
	11	○	三万田式極少量 (II・III)		剥片(II) 焼灰(III上層)		
II	4	○	三万田式少量(II・III)				
	5	○	三万田式数片(II・III)			住居跡床面?	
	6	○	三万田式少量(II)				
	7	○	三万田式少量(II) 浅鉢片(III)			須恵器伴う 住居床面?	
	9	×	三万田式少量(III)				
	9-1	○	三万田式少量(III)				
	10	○	三万田式少量(III)				
III	4	○	三万田式少量 (I・II・III)		(IV)以下遺 物なし		
	5	×	三万田式数片(II)	磨石(II)			
	6	○	三万田式6片(II)	磨石 ² (II)			
	7	○	三万田式 ² (II) " (貝殻条痕)(I)		黒耀石(I)半 面打痕ある石		
	8	○	三万田式少量(III) 御領式" (III)	磨石(II)	御領式三万田 式混在		
	9	×	三万田式少量(II・III)	石鏃(II)			
	9-1	○	三万田式多量(II)	石鏃(II) 凝灰岩製			
	10		三万田式少量(I)				
	5	○	三万田式多量(II)		層界が不明確		
	6	○	三万田式多量 面平式5片	石鏃?			

IV	7	○	三万田式多量 (II)				
	8	○	三万田式多量 (II)	打製石斧3 (II)	II・III層の境界不明確 土器包含層が幅広い		
	6	○	三万田式多量(II・III)	バチ形石器(II) 石刃 (III)			
V	5	○	三万田式多量 (II)				
	6	○	三万田式多量 (II)				
	7	×	三万田式少量 (II)		III層より現代 陶器出土		
	8	×	三万田式少量 (I~II)		I~II層攪乱		
A	3	○	三万田式 3片 (II)				
	4	○	三万田式少量 (II)		III層下部、 炭化物あり		
	5	○	三万田式多量 (II・III)	石錘1(III)			
	7	○	三万田式 15 (II~III)				
	8	○	三万田式 (III) 御領式 (III)	磨石1(II) 打製石斧2(II)			
	10	○	御領式少量 (II)	打製石斧(II)			
	11	○	三万田式16片 (II)		剥片 (II)		
B	7	○	三万田式少量 (II)				
	8	×	三万田式 1片 (II)		III層上部ま で攪乱		
	9	○	曾畑式 (III)				

034

昭和43年度埋蔵文化財緊急調査概報

昭和44年3月

発行所 熊本県教育委員会
熊本市出水町今915

印刷所 熊本光生印刷株式会社
熊本市西坪井町143



この電子書籍は、昭和 43 年度埋蔵文化財緊急調査概報を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：昭和 43 年度埋蔵文化財緊急調査概報：伝鞠智城跡 三万田遺跡

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

電話： 096-383-1111

URL：<https://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2024 年 9 月 5 日